

NOSニュース

- 本日の定期演奏会は、当初10月3日・朝日生命ホールにおいて開催予定のところ、芸術祭参加の日程調整のために、本日に変更し、会場も日仏会館ホールとなりました。特別会員はじめ一部の方々に連絡不十分で御迷惑をかけたことを深く御わびいたします。
- 第7回の定期演奏会は、来年6月初旬に開催の予定です。会場、曲目などは未定です。
- 日本音楽集団の年鑑をつくりました。御希望の方は受付においてありますので自由に御持ち下さい。

特別会員募集の御知らせ

1. 募集人員 先着 100名様まで
2. 締 切 本年12月末日
3. 特 典 定期演奏会の御案内、割引優待、座席確保。
放送、その他出演の御案内など。
4. 会 費 割引料金を演奏会場の受付でお払い込み下さい。
5. 申 込 会場受付または下記に御連絡下さい。

清水義矩方

TEL

特別会員申込書

No.

御住所					
御氏名					
御職業	御年令	才	急別	男・女	御住所・御氏名のための御記入でもけっこうです。

日本音楽団 第6回定期演奏会
NIHON ONGAKU SHUDAN
THE 6TH REGULAR CONCERT

昭和42年11月7日

NOVEMBER 7, 1967

[出演] 日本音楽集団同人

[客演] 芝 祐 靖 (竜笛)

午後6時30分開演 日仏会館ホール

6:30 P.M. at NICHIFUTSU KAIKAN HALL

曲 目

1. 六重奏曲 / 伊藤隆太 作曲

箏	十八絃	三絃	三絃	篠笛	尺八	} 指揮
(坂井)	(宮本)	(杉浦)	(野坂)	(向山)	(宮田)	

日本楽器のための

2. 組曲「面」 / 元橋康男 作曲

1. 翁 ^{おきな} 面	2. 狂言面	3. 女 ^{にょ} 面	4. 鬼 ^き 面						
箏	箏	十七絃	琵琶	篠笛	尺八	尺八	打楽器	打楽器	} 指揮
(野坂)	(坂井)	(宮本)	(山田)	(向山)	(古賀)	(宮田)	(田村)	(清水)	

—[休憩 15 分]—

3. 三群のための形象 / 三木 稔 作曲

1. 居 ^い 機 ^き	2. 文 ^あ 様 ^や	3. 鬪 ^{とう}	
箏	箏	尺八	尺八
篠笛	箏	打楽器	打楽器
(芝)	(野坂)	(田村)	(清水)
(向山)	(坂井)	(宮本)	(古賀)
			(宮田)

4. 三絃と日本楽器によるディヴェロップメント / 長沢勝俊 作曲

箏	箏	十七絃	琵琶	三絃	篠笛	尺八	尺八	打楽器	打楽器	} 指揮
(野坂)	(坂井)	(宮本)	(山本)	(杉浦)	(向山)	(古賀)	(宮田)	(田村)	(清水)	

PROGRAMME

1. Sextet / Composed by R. Ito

2. Suite For "Men" By Japanese Instruments / Composed by Y. Motohashi

1. Okina-men 2. Kyogen-men 3. Nyo-men 4. Ki-men

(men = a mask, okina = an old aged man, nyo = an woman, kyōgen = a "Nō" farce, Ki = an ogre)

—[interval 15 min]—

3. Movements For Three Group / Composed by M. Miki

1. Iki 2. Aya 3. Toh

(1st group = wind instruments, 2nd group = strings, 3rd group = percussions)

4. Development For Sangen And Japanese Instruments

/ Composed by K. Nagasawa

PLAYERS

[KOTO] T. SAKAI
K. NOSAKA
[JUSHICHIGEN] S. MIYAMOTO
[BIWA] M. YAMADA
[SANGEN] H. SUGIURA

[SHINOBU] E. MUKŌYAMA
[SHAKUHACHI] K. MIYATA
M. KOGA
[PERCUSSIONS] T. TAMURA
Y. SHIMIZU

GUEST PLAYER

[RYUTEKI] S. SHIBA

CONDUCTOR

C. YOKOYAMA

曲目解説

六重奏曲

この曲は「民族音楽の会」の委嘱によって、1966年7月から8月にかけて作曲された。編成は尺八2、三絃2、箏および十七絃であるが、本日は尺八一管を篠笛にかえて演奏される。曲は三つの楽章からなっていて、等1楽章はソナタ形式に準じた短いアレグロ・リゾルトの気まじめな曲、第2楽章はレントで第3楽章を導入する簡素な曲、そして第3楽章はこの曲の大半を占める軽い気分の曲である。作曲者は1955年以来5年間、邦楽伝統技法の掘り下げを意識的に行ない、その後在外を含めてそれを考え直した期間ののち、それまでに得られた技法の範囲で、自由に素直な音楽を書こうと考えた。この五重奏曲は、その時の作品群の一つである。

日本楽器のための組曲「面」

昔の人にとって、面は単なる飾りものや玩具ではなく、信仰と結びついて大切にされてきた。たとえば舞楽の竜王面を開帖すれば雨が降るなどと信ぜられ、面を御神体としてまつっていたほどである。今日、日本の伝統芸能（芸術）の中での面というものを総合的にとらえようとすれば、その発生の時代、伝来の系路、そしてそれらの面を保存し発展させた流派・地域・階層など、その様相は広範囲にわたるであろう。しかしこれらの種々雑多な面を人格的な面から分類すると、いくつかの象徴的な性格を持つ面相が浮かび上がってくる。そしてそれらの面は昔の人の信仰の心を今日の我々に伝えようとしている。以下に挙げる四つの表題は昔から今に伝わる信仰の伝統であり、また、作曲者の創造した新しい個性でもある。〈翁面〉＝老人を象徴するもので、個人の歴史と精神生活の内容をしめす深いしわの彫まれた面。〈狂言面〉＝表情豊かに語り合う、こっけいな面。〈女面〉＝すき通るような神秘感と、温厚なやすらぎをたゞえる女性の面。〈鬼面〉＝童心に強いものへのおそれと憧れとを感じさせる、荒彫りの民俗的な面。

三群のための形象

「例えば文学上にハムレットとか ドン・キホーテのような不滅の形象があるように、ある特定の音楽様式にはいくつかの代表的な形象があるはずである。この曲の場合、私たちの楽器を三つの特徴的な群に分け、その音色と機能に伝統的な背景を加味した私なりの形象を探りたかった。それをことばに圧縮した結末が「居機」「文様」「擣」ということになる。もちろんこれらの群は別個に現われるけれども、精神的持続はこの順に従って波動のように伝えられることを期待している」（作曲者のことば）

居機とは管を吹き抜く呼吸の絶妙な気合いをいう。竜笛、篠笛、尺八二管という管楽器群四声部からなり、禪的な世界を想い浮かべさせる。文様は綾であり、洋楽的にいうならばアラベスクである。二面の箏と十七絃の三声部が旋律的オスティナートをめぐってからみ合い、音の綾を織りなす。擣は擣衣（きぬた）の擣で、打ちたくことを意味する語

である。あるいは音声としての Toh! という気合いをも連想させられる。それはまた、二人の奏者による打楽器群の「鬨」でもある。

三絃と日本楽器によるディヴェロPMENT

三絃は日本楽器の中において、最も大きな音量を持ち、ダイナミックな表現力を持った楽器である。しかも細棹、中棹、太棹と三つの種類があって、それぞれの特色を持っている。また撥や駒を変えることによっても、さまざまな効果を得ることができる。この曲では細棹と太棹の三絃が使用され、独奏楽器としての面白さをねらって、いろいろの試みがなされている。全体は三つの章に分かれていて、それぞれの章において異なった楽器の取りあつかいが行なわれている。第1章は細棹により華やかに、第2章は細棹の駒と撥を変えて蛇皮線ふう、そして第3章は太棹により民謡三味線ふう作曲されている。

（鞍掛 昭二）

音楽集団への期待

伊藤 隆太

立派な音楽は、それが作られた国の感じ方から出発して、その国の人たちの心のものでなく、世界の人々の心のもとなったものが、ほとんどであるといつてよいらしい。

日本には伝統音楽があった。鎖国のおかげで、特殊性が発達し、局地性からも出なかったらしい。そこへ輸入音楽が現われた。これは世界文化の動きに伴って、前述の国際性を獲得したものであった。その時点においては当然、わが国の伝統音楽は国際性をもつか否か自ら検討する時間もなく、輸入音楽の影響を受けるに至った。正確な価値判断ないしは消化、自己のものを併せて表現できるまでには、やはり何世代も重ねるだけの時間がかかる。

今なら誰しも思うように、「伝統の中に内在していると思う必然性の線に沿って、輸入音楽でもなければ、伝統音楽でもない新しい音楽」を作る方向は、必然的に存在する。この方向に向って、現代の情勢は一步前進した感がある。昭和前期よりも、仕事はむづかしいが、さらにやりがいがあるであろう。

外人たちは、古い知識から空想した日本の特殊性のみを求めたがり、少しでも現代性があれば、無視したがる傾向がある。これは他の芸術領域における最近の批評に見られる。また一方、日本人たちは「現代性」という言葉に多かれ少かれ劣等感を持っているものである。外国の現代性とは、自身の伝統を抜け出す「合い言葉」でもあるように思われる。日本では輸入されたものとの間に立って、問題がさらに複雑である。

一人一人が頭の中で、こういうことに抵抗しつつ事を運ぶよりは、日本の伝統を外から眺めているよりは、共同作業の場を作る方が手取り早い。そういう場が多ければ多いほど間違いが少くなる。この団体の使命に期待をかけるのは、私だけであろうか。

(1967, 10, 16)